
平穩に生きたかった・・・

妖精瞳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

平穩に生きたかった・・・

【Nコード】

N9445L

【作者名】

妖精瞳

【あらすじ】

リリなの世界の大企業会社の次男に転生した二ノ宮 竜司神にあつた覚えはないが、なぜかチート最強級になっている竜司は平穩に生きれるのか!!? 無理だ ですよね。

転生者は三人います。残り二人は、神による転生です。それぞれ、無印 A・sから介入していきます。当然、竜司は無印から・・・

プログラマー(前書き)

ほとんど説明です。

プロローグ

どうも、二ノ宮 竜司、7歳だ。

実は俺、転生者である。

ここは、『リリナの『or』とら八』の世界のようだ。

転生者といっても、神の手違いで〜とか、
当選して〜とかではない。

いつものように仕事から帰って、寝たんだが、
気づくと赤ん坊になっていた。

当初は混乱したが、元の世界にそれほど未練があるわけでもないので
ここで生きることにした。

どうやって『リリナの『or』とら八』の世界だと仮定したのかと
いうと

『月村家』と『バニングス家』の存在だ。

二ノ宮家はかなりの企業家で、世界でも十指に入るほどである。

その英才教育を受けている時に偶然知ったのである。

しかも『アリサ・バニングス』と『月村 すすか』と同じ年齢のよ
うだ。

原作とはあまり関わりたくない。

まあ、住んでいる所は海鳴市でもないし、

次男なので、事業的な関わりも無いので会うことすらないだろう。

・・・と、思っていた時期が俺にもありました。

その日俺は地下で、銃の訓練をしていた。

話はそれるが、なぜそんな事をしていたのかというと五歳で銃を習えといわれたのだ。

『BLACK CAT』の世界観もリンクしていたことには驚いた。

代々二宮家に伝わる護身術で、その中に黒爪ブラッククロウや黒十字等の技があった。

気のせいだと思っていたが、去年一歳上の兄貴の『森羅』より才能があるということ、家宝をもらった。

『ハーデイス』しかも、フルのオリハルコン製だった。

幸か不幸か、俺はナノマシンを持っていた。

同じく5歳の頃、原因不明の病気に罹りその際一か八かで、医療用開発途中だったものを打ち込まれた。結果的には治ったが、二つの特殊能力を得た。

ナノマシンに猫の遺伝子でも入っていたのかその一週間後ぐらいから、黒猫に成れるようになった。

その事を家族に話しても拒絶されなかった。

むしろ抱きしめられた。

証拠に思っつて、猫になろうとしたら

まだ慣れてなかったのか、黒い猫耳と尻尾だけで、
コスプレっぽくなってしまったからだ。

もう一つは、『弾丸創造』とでも言えばいいのか

どういう理屈かはわからないが、

通常弾はもちろん、自分で考えた効果の特殊弾すら
創れるようになった。これは、危険すぎるので
家族には報告していない。

まあ、とりあえず。超電磁砲が撃てるか気になった俺は、
親父に頼んで核シエルターに連れてってもらった。
結果だけ言おう。

威力・・・・・・・・通常の超電磁砲の1.5倍

速さ・・・・・・・・通常の超電磁砲の2〜3倍

限界装填数・・・30発撃つても、まだ撃てる気がした。
うん、かなりチートだ。

え〜と、銃についてとナノマシンについて説明したけど
何の話だったけ？

あ、そうそう思い出した。

地下で、銃の訓練をしていた俺は、急に親父に呼ばれた。
親父のところに行く

「今日は、私と森羅とパーティへ言ってもらうからがんばってね」
と言われ、いつの間にかタクシーに着替えさせられ
車に乗せられていた。メイド隊、恐るべしっ！！

うん、お分かりの人もいると思うんですけどね。
いたんですよ。あのお嬢様二人が・・・

俺は係わり合いになりたくなかったんで

二ノ宮家と深い関係の人達と最低限の挨拶だけして
パーティホールの隅っこで紅茶を飲んでいた

・・・後に思えば、これがまずかったんだろう。

一人ぼっちの同年代に声をかけないわけがないだろう。

「あんだ、一人で何やってんのよ」

ほらな・・・

プログラク(後書き)

この後の展開は、また別に
時間が跳びます

一話（前書き）

めっちゃ短いです

一話

竜司 9歳

「森羅、竜司！お前等には一人暮らしをしてもらう！！」
親父が突然そんな事をのたまった。

「は？」

「ぼけたか？糞親父」

兄貴が突っ込む

「ぼけてはおらんさ。これは、二宮家としての正式な決定だ」

「は？んじゃ伝統か何かか？」

「いんや、俺の思いつき」

「ふざけてんのか！親父！？」

「いや、俺はふざけちゃいねえ。ただ真剣に遊んでいるだけだ！！」
ボコッ！！

兄貴の膝蹴りによつてすつ飛んでいく親父

「ふん。まだまだだな」

が、いつの間にか無傷で座っている

「化け物め・・・」

「安心しろ。住む所は、バニングス家と月村家がある町だ。何かあったら頼るといい」
やばい原作介入してしまう・・・

「それでも一人暮らしなんて嫌だぞ。」
兄貴！がんばって反対してくれ

ちなみに俺は、布団で簀巻きにされている

「大丈夫だ。一人暮らしといっても、マンション生活で隣の部屋同士にしたから」

あ、やばい

「なら、いいだろう。行くぞ、竜！！」
そう言っつて、俺を引きずっていく兄貴
ブラコンの馬鹿野郎

「あ、学校は3週間後あたりから通ってもらっつぞ」
もう、知らんよ

.....

翌日

で、やって来たのは、高級マンション。
やべえええ。フェイトが住んでる所じゃん。

「ここか。意外といいところじゃん」
こちらら良くないんだよ！！

「とりあえず、食材でも買いに行くか」

うーん

「あー買った買った。……肉買いすぎじゃね？」
俺がそう言つと

「いいだろ別に。肉は血をつけるために必要なんだからな」

「いや、それでも多いつて。なんだよ肉十？とか、おかしいだろ」

「それでも足らんが……」

「だめだこいつ……」

その後、雑談が続いた　　が

帰る途中、兄貴が翠屋の前で目を光らせた

「……明日来るか……」

ヤル気だよ、このバトルジャンキー。

「無理すんなよ……？」

「大丈夫だ。三人の中で闘うのは、真ん中の強さの奴だけだ
一番強い奴には、まだ勝てない」

「なら、いいけど……」

「だが、ひさびさにお前の戦うところが見たいな。」

おまえが一番強い奴と闘ってくれないか」

「は。気が向いたらな。つーか明日じゃなくて明後日な。明日はバニングス家と月村家に行かなきゃなんねえだろうが」

「む。我慢するか」

その後、俺達は飯食って寝た。胃が重かったといっておこう

一話（後書き）

森羅は魔法使い云々には出てきません。
日常パートなどぐらいい

一話（前書き）

文才が欲しいよ。

二話

早朝、二つの人影が爆走していた。

「ハッハー！どうした竜！お前の速さはそんなもんかー！！」

「お前に言われたかねーよ、糞兄貴！！俺の1/3しか重りがないのに

引き離せないってドンだけだよ！！」

「グッ。ち、違う！これは、お前のことを思って待ってあげてるんだ！

断じて、俺が軟弱なわけではない！！」

「ほお。だったら、さっさと家に重り置いて迎えに来てくれよ

ア・ニ・キ」

「グ~~~~、っと！前方に人影3つ発見。減速するぞ。」

「はいよ（ツチ、都合がいいな。・・・ってあの三人はまさか）」

で、人影の近くに来た。

「ちわ~~~~」

「む、恭也、美由希。」

「「「おはよう」「

「あなた方も鍛錬ですか？」

「まあ。日課だよ。そういう君達は、ここらで見ない顔だが・・・？」

「ああ、昨日そのマンションに引っ越してきたばっかなんですよ。あ、俺は、二ノ宮 森羅で こいつは弟の竜司といいます」

「そうなのか。私は、高町 士郎という。この子達は私の子で・・・」

「美由希だよ。」

「・・・恭也だ」

「ハイよろしくお願いします・・・それより恭也さんでしたっけ。あなた、翠屋という所で、働いてますか？」

「ああ。それは家が経営している喫茶店なんだよ。確かに恭也は時々働いてくれるが、どうしてだい？」

「いえ、昨日感じたのは貴方だったんだな、と・・・。今度、俺と模擬戦してくれませんか？」

「・・・父さん」

「ああ、いいよ。だが、私じゃだめかい？」

「ははは。俺じゃまだ勝てませんよ。そのくらいはわかるつもりです。」

ですから、俺より遙かに強い竜とやっつけてくれませんか？」

「兄貴、面倒だといっただろう・・・（せめて、なのはだけでも関わらないで

いたいんだよ！）」

「そうか残念だな。私としては、強者である君と闘いたいんだが」

「お父さん、その子そんなに強いのか？」

「美由希・・・相手の力量ぐらい測れるようになれ・・・」

「うう・・・。じゃあ恭ちゃんはわかるのか？」

「ああ・・・悔しいが、俺じゃ勝てないだろう。父さんでも勝てるかどうか・・・」

「ええ！そんなに！！じゃあ、どっちが勝つのかな」

美由希が竜司に尊敬の目を見た

「（そんな目で見ないでくれ）はあ・・・。一回だけならいいですよ・・・。」

「ありがたい・・・残念ながら今日は、私も恭也も用事があったね。今度翠屋に来てくれないか？」

「いいですよ。こちらとしても、昨日引越したばかりなんで色々忙しい

ので・・・では、そろそろお暇させてもらいますね。竜」

「ああ。わかってる（はあ、どうしよう。原作と関わりたくないのに）」
そう言っつて、森羅と竜司はスピードを上げて、三人から離れていった。

side 士郎

あの子達が見えなくなった後

「父さん・・・たぶん、あの子が、忍が言っつてた子だよ」

「ああ、やはりあの子は二ノ宮家の麒麟児か・・・。」
だったら、あの覇気も納得がいく。

あそこは、暗殺などの汚い仕事をしていないのに
本家の全員がプロの護衛よりも強いというよくわからない家系だ。

裏での、その家の話題で最も新しいのが、
『わずか2年半で現家最強である父と互角に戦えるようになった』
というものだ。信憑性がなかったが今日会っつてわかった。
あれは、将来怖いことになるよ、

「・・・父さんから見て、勝率はどのくらいなんだ・・・？」

「・・・ああ、5・・・いや4割あればいい方だろうね」

「そう、か」

恭也もある程度はわかっていたんだろう。

「さあ、帰っつて、鍛錬だ。あの子達が来る日までに強くならないと。」

小さい子にはまだ負けてられないよ」

「ああ」

side out

~~~~~

side 竜司

「さて、準備は終わったが・・・兄貴付いてくるか？」

「いんや、ここで昼ドラでも見とく。せいぜい、ハーレムに苦勞しろ」

「あいつらは、一時の気の迷いだ。こんな最低男なんか・・・すぐに

対象が変わるぞ」

「そう、卑下するもんでもないと思っけどね」

「はは、んじゃ。行ってきます」

「はいよ」

~~~~~

「すみませ〜ん。二ノ宮ですけど〜」

「わかりました。少々お待ちください」

がちゅ

「お待たせしました。こんにちは、竜司様」

「こんにちは、ノエル。すずかたちは？」

「こちらで、お茶を飲んでおります。ついてきてください。」

「はい」

びくっ

「ん？」

「どうかしましたか？」

「いや、なんでもない（何だ、今の感覚？）」

二話（後書き）

主人公 原作ほとんど 覚えてない

次回、巨猫事件

・
・
・

が解決した後のお茶会。
転生者同士の出会い。

三話（前書き）

転生者の会合はやっぱりやめました。
巻き込まれ型で行こうと思います。

アリサのツンデレ分が低いです。

は〜。文才がね〜。

三話

こちらから、4人でお茶会してる集団が見えて、
あちらからは見えないような微妙な位置

「すみません、ノエルさん」

「はい？何でしょうか」

「俺がここに来たこと、少しアリサ達に黙っててくれませんか？」

「……なぜでしょうか？」

「理由は後でお話します。俺はあの、アリサとすずかじゃない
二人が帰るまで、そこらの草むらに隠れていますので……」

「……あ、」

シュバツ

ノエルが何か言おうとしたが、竜司はその前に消えて行った。

その後、ノエルは少し考えた後、竜司の言つとおり
すずか達には、言わなかった。

side 竜司

はあ。

なんで、主人公がいるんだよ。

フレットっぽい奴がいたから、猫が巨大化した日だとは思っけどなに？神様は俺のこと嫌いなのか？

・・・しかも、知らない奴いたし。

ここは、あくまで『リリなの』かも知れない世界だから普通の人か、転生者かはわからないけど・・・

まあ、魔法関係者と考えていいだろう。

にしても、さすが達になんて言おうか・・・

あ、あいつらが帰るみたいだ。そろそろ出るか

side out

「あ、そろそろ私も鮫島に電話しなくtt」

「お待ちください、アリサ様」

「え？どうしたの、ノエル」

ノエルの行動に、さすがが首をかしげた時。

がさがさ

「よつとー！」

竜司が木の上から現れた

「「竜司（君）！？」」「」

「よっ！アリサ、すずか。こんにちわ・・・じゃ少し遅いか
こんばんわ」

「何あんた！？不法侵入してきたの！？」
アリサが竜司に突っかかってくるが

「いいえ、アリサ様。竜司様が来たのは先程のチャイムの時です。
訳は後で話すといい。あなた方・・・いえ、正確には、
なのは様と明人様を見たたん、隠れてしまいました。」

「ふ〜ん、そう。じゃあ隠れてた訳を聞きましょうか？・・・
アリサが若干黒いオーラを出して、詰め寄ってくる。

「お、落ち着け。ちゃんと話すから・・・すずか」

「うん、何かな？」

「忍さん呼んできてくれないか？」

「・・・うん」

「なに？そんなに大事なこと？」

「・・・・・・」

~~~~~

今、ここにいるのは竜司、アリサ、すずか、忍

「さて、俺が前世の記憶もちだということは話したな？」

「うん」

「そうそう、そういつて私達を遠ざけようとしたもんね」

「ぐつ。今は武芸も教えてんだから良いだろう。

それにしても、俺の精神年齢は、お前等とかなり離れてるんだぞ。

なんで、そんな奴好きになるんだよ・・・」

「武芸のほうは、感謝しているわ。素人がじりぐらいなら撃退できるようになったから。

・それと、その、と、歳なんか関係ないのよ！

ね、ね！すずか！！」

「うん。少なくとも。身体は、私達と同じだもん。

私達は竜司君だから、す、好きなの」

アリサとすずかは、顔を真っ赤にさせて言う。

「は。惚け話は良いから。早く話してくれない？

なんで、私まで呼ばれるのか気になるし。」

「あゝはい。誤解が無いように、まず最初に言うておく。

俺は『ここを現実だと思っている』」

「・・・どういう意味？」

忍がいぶかしげに聞く。

「簡単に言おう。ここは、俺の前世のアニメの世界に限りなく近い。

そして、アリサ、すずかも主人公ではないが、物語に登場している。

」

「『！』」  
ガタツ

三人とも驚き、目を見開いた。

「・・・だから、私達の秘密を知っていたの？」

「ええ、まあ」

夜の一族のことは、武芸を教える時に、

すずかが言ったのだ。当然二人は受け入れたが、

竜司は、元から知っていたような口調で話していたのだ。

「俺が最初、すずか達を避けていたのはその物語に  
巻き込まれなくなかったからです。」

「どういうこと？私達は、主人公じゃないんでしょう？」  
アリサが聞く

「ああ。主人公じゃない。だが、主人公に近い位置にいる。

・・・アニメのタイトルは『魔法少女リリカルなのは』

ここまで言えば、わかるだろう？」

「『！』」

また、三人とも驚く。

「まさか、なのはちゃんが主人公？」

すずかが半ば確信を持って聞く

「そのとおりだ」

「……ちよつと頭の中、整理させて」

~~~~~

数分後

「竜司。そのシナリオを一回話してくれない？」

「ん〜。まあ、いいだろ。」

四話（前書き）

誰か文才をよこせい！！

「」は念話です。

四話

説明終了後

アリサたちは思い当たる節があつたのか考え込んでいた。忍さんは魔法やジュエルシードに興味深々だったが・・・

すずかが俺の話の違和感に気づいたのか聞いてきた

「ねえ竜司君。竜司君の話には、明人君が出てこないけどどういうことかな？」

お茶会の途中で、その人物も高町・スクライアと共に抜けたらしいやはり魔法関係者か

「言つたろ。アニメの世界かもしれない、と。必ずしも、俺が知ってる通りとは限らないんだ。それより、そいつの情報を教えてくれないか」

「う、うん。彼は・・・」

すずかの情報を整理すると・・・

- 1 名前は、陣内 明人。
- 2 小さいころ公園でなのはと会った。
- 3 その後、行く当てのないことを知り、高町家が保護
- 4 現在、同じクラスメイト。
- 5 アリサ以上に頭が良い。
- 6 運動能力も高い
- 7 行動が大人びている
- 8 いつも、金の腕輪をしている。

9 基本、いい奴

10 なのはの、恋愛対象

・・・十中八九、転生者だろう。

2番目は、おそらく高町士郎が怪我した時の事だ。

5・7番目は、大方の転生者に当てはまることだろう。

8番目・・・これはデバイスか？

9番目・・・アリサ曰く、「なんかむかつく」「らしい

10番目、こいつ等にも言えるけど、正直小3で恋愛は早いと思う。

一応、すずかたちにそいつは転生者かもしれないと言っておいた。

その後、お開きになった。

~~~~~

現在帰宅中

とりあえず森の近くの、草むらの上に座って、手を着いた。

「はあ。まさか、アリサたちにアニメのことまで話すことになるとは。」

精神的に疲れる・・・」

「ああ、くそつ。さつさと、事件が終わってくれよ。

転生者君、君が持っているだろう能力を使ってさあ。

過去の人さアリシアえ無事だったら、気を使わなくていいんだがなあ」

俺がそう呟くと、突然右手が・・・正確には、その下にある青い宝石が光った。

「なっ！！なんでここに、こんなもんがあんだよーーーー！！」

!？」

そのまま、辺りいつたいは光に飲まれた。

side out

side 明人

帰路の途中に、いきなりジュエルシードが発動した気配を感じた。  
なっ。今日は、巨大な猫だけじゃないのか。

こんなこと、原作にはなかったぞ!!!?

はっ！僕が神様に力もらった時に、言っていた  
僕以外の転生者の仕業か？

とにかく、なのはは落ち込んで気づいてないからから、僕一人で行  
こう・・・

気配が治まった!!!?もう封印したのか？

まあ、いい。とりあえず反応があったところに行こう!!

〔アルトリア。場所は〕

デバイスに場所を聞く

〔特定できてます、マスター。南へ3キロの地点です〕

「なのは、僕は少し用事を思い出したから先に帰ってて」

「う、うん」

〔明人！僕も行くよ!!〕

ユーノが念話で入ってきた。

「いや、ユーノはなのはを励ましていてくれ。じゃっ！」

「あっ……」

side out

光に包まれたが、すぐに収まった。

何が起こったんだ？

そう思って現状確認をする。

自分の身体……うん。いつも通りの調子だ。形の変化もない。

次、ジュエルシード……あった。輝きはなくなったが、自分の右手があつたところに

落ちていた。

最後、周囲……二つの人影が倒れていた。

……最後がおかしい……

俺はその二つの人影を確認した。

一つは、金髪の女の子。間違はなく、アリシア・テストロッサだ。

一瞬フェイト・テストロッサかと思った。だが、

アホの子（ひどい！！）ではなく、知的な感じの寝顔だった。

……途中、なんか電波が飛んできたが……

俺の記憶では、事故の時5、6歳だったんだが、見たところ9歳の身体である。

さらに、死体はプレシア・テストロッサの所にあるはずだ。

まあ、あの死体が記憶を転写してないクローン体だったり、これで、原作が変わっているという可能性もある。

とりあえず、気にしないことにする。

そして、もう一人。黒髪の成人男性の方だ。

「（アリスア・テストロツサはいい。確かにあの時、そんな感じのことを言った。

だがっ！いったいつ！！なんでっ！！！！

クライド・ハラウンがいるんだよおーーーー！！！！

あれかぁ！？俺が、アリスアに限定せず、過去の人って言ったのが原因なのか！！？

なんで厄介ごとが回ってくんだよおーーーー！！！！？

つて！それどころじゃねえ！！今の感知して、奴等がくるかも知れねえ

とりあえずここから……（」

そう思い逃げようとするが、人が倒れているのに何もしないと云うのも

寝覚めが悪いので……

~~~~~

「ただいまあ〜」

誰もいないが、とりあえず言ってみる。

「よいしょつと」

担いできた二人をソファアの上に置く

「ふうーこれからどうすつかねえ？」
つい連れて来てしまった、二人をどうするか考える。

「ん、んん・・・」

しばらく考えていると、アリシア・テストロッサが気がついた。

いきなり知らないところにいるのも不安だろうと
ジョークをかますことにした。

「あれ、ここは・・・」

混乱しかけてる彼女の前で、跪き。

「貴方が倒れてましたので、私がお助けしました。
お嬢さん」

そういつて顔を上げて微笑む。

「はっつ・・・／／／／」

なんか、顔を紅くした。なぜ？

四話（後書き）

まさかの無自覚で、アリシア救出。ついでにクライドもさらに、アリシアにフラグ立てるのも忘れない。

そこに、痺れる、憧れるー！！

自分が考えているヒロインは、ハーレムで。

アリサ・すずか・アリシアさらにもう一人の、4人です。

アリシアは、知的な感じで行きたいと思います。

もう一人は、オリキャラです。

では、次もよろしく願いします

五話（前書き）

短いです

誰か文才を

五話

あの後、色々あったとだけ言っておこう。

アリシアにある程度の情報を与える。

少し考えただけで、現状を理解した。

クライドが起きる。

同じく、情報を与える。

軽く、混乱する。

……二人の対応の仕方が逆だと感じるのは、俺だけだろうか？

「さて質問はないか？」

「あるわ。……ここって管理外世界なのよね？」

「なのになんであなたはそんなこと知っているの？」

「ああ。それは、私も気になっていた。どういうことだ？」

「ああ、それか。それは、俺が前世の記憶があって、ここがそのアニメの世界だったから。以上。」

「いちいちめんどくさかったので、ぶっちゃけた。」

「はあ!?!?」「」

「信じる信じないはお前等の自由。これ以上そのことについて聞くな」

クライドは混乱中だが、アリシアはすぐに復活した。

・・・お前ほんとに九歳児？

「大事なことは、おいおい話すが。お前等の待遇を決める。どうしたい？」

「どうしたいって、言われても・・・」

「どうするかね・・・」

二人は悩んだが、答えが出なかった。

そこに俺は

「うん。とりあえずクラウドさん。デバイスってあります？」

クライド「あ、ああ。あるにはあるが・・・闇の書の時のせいで壊れているぞ」

それがどうかいたのか、と目で問いかけてくる

「俺は物語にできる限りかわりたくないんだ

アリシアはヒュードラ事件後、クライドさんは闇の書事件後

気が付いたら地球にいた。その時、俺が二人を保護

おそらく次元振に巻き込まれたのだろうという理論に行き着く

その後、ジュエルシードが地球に降ってくる。

そして・・・」

「クラウドさんが、それを危険だと判断するがデバイスがないため行動できず

しかし、誰かが解決しているので傍観に・・・

しばらくすると管理局が来るので、きたら私達を出して事件解決・
であってる?」

「あってるけど・・・なんでわかった?俺はそこまで言っていないぞ」

「このぐらい私にとっては簡単よ。まず物語にできる限り関りたく
ないってことは

保護する私達にも関わらせたくないってことでしょうか?

そして物語というからには、誰かが危険物ジュエルシードを片付けるのだろうと予
測できる

で、あなたは事件解決を願って私が呼び出されたって言ったわね
だったら、私が事件解決のキーになることは間違いない。

・・・心当たりがあるのよねえ・・・

お母さんって親馬鹿の上若干ヒステリックが入っていたからねー
私は本来なら死んでいたはずだから、死者蘇生を試しても仕方
ない気がするしねえ

・・・ねえ、違うところある?」

「・・・お前、マジで九歳?」

「失礼ね。お母さんは甘いけれど、仕事熱心でもあるから結構暇だ
ったのよね。

だから、家にあった本とか資料とか見てたらこんな頭脳明晰になっ
たのよ」

「自分で言うか・・・」

「事実でしょ」

「まあ、な」

ポカーンと間抜け面をさらしてるクライドを横目で見ながら

竜司は、「(あれ?転生者とか関係なくもつすでに原作当てにしな
いほづがいいんじゃない)」

と
思
っ
た
そ
う
な

六話（前書き）

大幅改変

相変わらず文才ねえな

大幅編集

六話

カポーン

「いい湯だな、バババン　ってか？」

「誰に言っただ？ 竜」

「気にするな」

「わかった」

どうも、竜司だ。ただいま温泉にいる。

理由？ なんとなく入りたくなったからだ
え、違う？ 温泉に入ってる方？

そりゃ、ここに来て入らなきゃ損だろう。

横にいる馬鹿は、温泉行くつつつたらついてきた。

居候二人は、家で待機してもらってる。当然文句は言っていたが
ああ、兄貴に言ったら、お前が言うなら信じるぜと言って
マジで気にしてなかった。ブラコンスゲエ

さて、一時間も堪能したし・・・入りすぎではない・・・
そろそろ出るガラツ「あ・・・」・・・か？

テレレ〜 エンカウント〜

人外；高町 士郎・妹命；高町 恭也

転生者？；陣内 明人・淫獣；ユーノ・スクライヤ

・・・さて、どうしようか（汗

こいつ等が居るってことは今日だったのか。

ジュエルシード

「おや、森羅君に竜司君じゃないか。奇遇だね」

「ちわ〜」

「ども」

「土郎さん、誰ですか？」

「ああ、彼らは・・・」

「二ノ宮 森羅だ。よろしくう！」

「・・・同じく、竜司だ」

「あ、僕は、陣内 明人といいます」

・・・おもしれえ

あの目は、なんでも自分の思い通りになると信じてる目だ。
その歪みに気づかないって事は・・・いや、気づいてるからこそか？
まあどうでもいいか

「兄貴、先上がるぞ」

「ん、ああ俺も上がる」

「じゃお先に失礼します」

さて、どうするかね、これから。

あいつとは、理解できそうにないしな。
アリサがムカつくのもわかる気がする。

~~~~~

side 明人

なんか、敵視されてた

「ユーノ、彼って魔導師？」

「ううん、リンカーコアはあつたけど活性化してなかったから  
違うと思うよ」

頭の端にでも置いておくかな

さて、今日はフェイトと戦うのか。

この前ご飯作ってやったけど、ちゃんと食べてるかな。

~~~~~

時間跳躍

~~~~~

あいつに会うのが嫌だからアリサ達にも会っていない

「月夜の晩はきれいだね」

俺は今温泉饅頭を食べながら散歩中だ

なんか重要なこと忘れてる気がするけど

まあいいや

は？結界？……………

……………

忘れてたあ—————!!!!!!

昼間、あいつ等と会ったじゃん！！頭でも考えたじゃん  
馬鹿なの？死ぬの？俺？

o r z      o r z      o r z      o r z

「貴方は何者ですか？」

「正直に答えないと、がぶつといくよ」

うん。本当に、馬鹿なの？死ぬの？状態だよ

落ち込んでいる時に上から気配がしたと思ったら黒子が居ました。  
で、そいつを見て考え事をしてたら

デバイス突きつけてきやがったんで、この状況。

「だから言ってるだろう？巻き込まれただけだって」

「嘘つくんじゃないよ!!じゃあなんで私たち見ても驚かないんだい!!!!」

「それに、ジュエルシールドのことも知っていました。本当のことを話してください。何処の魔導師ですか」

はあ。つきあいきれねえ

「そもそも、俺は魔導師じゃねえって言ってんだろう。俺は帰るぜ。あばよ」

そういつて俺は踵を反す。

が、次の瞬間、

「フォトンランサー」

『Photon Lancer』

ヒュッヒュッヒュッ

「はっ!」

ガスッ

フェイトが攻撃しアルフが俺を捕まえようとするが、遅い。俺はすでに後方に下がっている。

「あの攻撃を避けるなんて、やっぱり魔導師ですね。

もしジュエルシードを持っているなら渡してください」

「ふ・・・ふ・・・ふ・・・ふふ・・・ふふふ」

竜さんでも怒ることはあるんですよ〜

ただでさえあいつの顔見てむかついてるってのに、その上この仕打ち、キレたよ。キレちゃったよ。

よし、そのくそママ「調教してちゃんよ(怒)」

六話（後書き）

次回戦闘です

七話（前書き）

戦闘短い

## 七話

side:フエイト

「(まったく!なんなの、あの白い子は! 明人は、私といた方がいいのに!

.....

ん?何、あの落ち込んでいる人? 結界に巻き込まれたのかな?)」

そう思つて、アルフと一緒に、下に下りていくと途中で男の子がこつち見て呟いた。

「.....ああ。ジュエルシードをあいつから奪った後か」  
声は小さかったけど、確かに「ジュエルシード」って聞こえた。  
アルフのほうを向くと、うなづいて

男の子に杖を向けながら言った

「貴方は何者ですか?」

「巻き込まれた一般人」

即答された。けど、一般人なら、私達に驚いているはずだし、  
なにより「ジュエルシード」という言葉は出ないはずだ  
だから私はもう一度聞いた

「貴方は何者ですか?」

「正直に答えないと、がぶつといくよ」

今度は、アルフからも言葉が出た。

しかし男の子の答えは

「だから言ってるだろう？巻き込まれただけだって」

あくまで一般人を貫く気だった

「嘘つくんじゃないよ！！じゃあなんで私たち見ても驚かないんだい！！！」

「それに、ジュエルシールドのことも知っていました。本当のことを話してください。何処の魔導師ですか」

「そもそも、俺は魔導師じゃねえって言ってんだろつ。俺は帰るぜ。あばよ」

そう言つて、彼は踵を返した。

「フォトンランサー」

『Photon Lancer』  
ピュッピュッピュッ

とりあえず私は、フォトンランサーを三つ撃ち

「はっ！」

ガスッ

アルフは捕獲しようとした。

しかし彼は避けていた。

これで私は確信した。

「あの攻撃を避けるなんて、やっぱり魔導師ですね。もしジュエルシードを持っているなら渡してください」

そう、魔導師じゃない人間が今のを避けられるはずがないのだ。

だから脅した。けど、帰ってきたのは……

「調教してやんよ(怒)」

恐怖の始まりだった。

side：三人称

それは戦闘ではなかった

一方的な展開だった

フェイトがきづいた時には、竜司の蹴りによって、バルディッシュが宙を舞っていた。

そして、あわてて掴もうと手を伸ばすが、竜司の回し蹴りが彼女の腹を捉えていた。

「かはっ！……」

そのまま吹っ飛び木にぶつかる。

「フェイトツ！おまえええー！……！！」

アルフが突っ込んできたが、いなし背後を取り、殴る。

さすが獣というべきか、勘による腕のガードが一応間に合い、後ろに飛んで、威力を減らした

が、そこまでだった。竜司はすでに彼女のとんだ先に居り。蹴りで上空に飛ばす。

「がああー!!」  
アルフは木の上を軽く越えたところまで、昇った。

「(やばいつ。このままじゃ地面に落ちて、またあいつに、・・・)」

アルフはそう思って下を見るが、彼の姿は、ない  
何処にと思った瞬間。木より高い位置にある彼女より上から声がした

「地面に落ちたらとか考えてんのか?・・・甘いな。這い蹲れ」  
その言葉と同時に強烈な踵落しが振るわれた。

そのまま地面に叩きつけられたアルフは、気絶していた。  
気絶してなくても動けないだろうダメージを負って。

竜司が着地すると、フェイトがいつの間にか取って、鎌になったバ  
ルディッシュを向けてきていた。

「アルフツ!!」  
「心配しなくても生きて入るさ。生きては、な」  
その言葉にフェイトは彼を睨むが、飄々とした態度を崩さない。

「貴様ああー」  
頭に血が上ったのか、直線で向かっていく  
それに竜司は、ズボンのポケットに手を入れて

「家族以外に試すのは初めてで、加減がわからんが、意識保てるか  
?」

そう言つて、知識から手に入れた技を使う

『居合拳』

三発の手加減された、拳圧がフェイトを襲う。

それに跳ね飛ばされたフェイトは、再び木にぶつかり、少量の血を口から吐き出す  
薄れ行く意識で、ニヤニヤ笑う竜司をみながらフェイトがやったことは、

『明・人……た・す・けて。あ・き・と』  
愛しく頼りのある人に念話を飛ばすことだった。

竜司は、気を失ったフェイトをアルフの上に乗せるとどこかすつきりした顔で、二人を放置して旅館の方へ遠回りして戻っていった。

旅館から一直線で向かってくる気配に気づきながら……

七話（後書き）

うわー！ー主人公の方が悪役っぽい

## 八話（前書き）

自分で何かいてるのかわからなくなってきた・・・  
読者どころか作者すら置いていく作品・・・

はあ

? || 3

## 八話

「ねえ、なにやってるの？あなた。自分が関らないといってたじゃない。」

「はい、面目ありません」

現在俺は正座している。なぜか？

先日起こったフェイトの虐殺を教えたからだ

「わかってるならいいわ、今度は気をつけてね」

「なあ……」

「何よ」キツ

ひいつと端で見てたクライドが悲鳴を上げる。……だからお前はほんとに大人か、と

「お前、クローンの話と虐待のことを聞いても何も感じねーの？」  
そのことをこいつらに聞かせると、クラウドは怒ったが  
アリシアは冷めた反応をした。

「あら、言ったはずよ。暇だったから本や資料を読んだって……」  
「まさか……」

「そう、あったのよ。人体実験の類が……もちろんそれはお母さんが処理するはずのものよ  
でも、強い好奇心のあった私は、見てはいけないものを見てしまう  
のよ

それは映像でね。人にほかの生物の細胞を入れたらどうなるかの実験だったわ。

余りにも悲惨でこの精神年齢は、その時今の状態に上がったと思っ  
ているわ」

「いや、精神年齢とっていいのかしらね？」

その時から下手に理解が高かった私は精神の崩壊を起こしかけた。  
崩壊する前に身体と精神を離すことができたわ、逆に身体と精神が  
あつてなかったおかげでね  
皮肉じゃない？精神が高かったから崩壊しかけて精神が高かったか  
ら助かったって。」

アリシアは狂ったような悲しみを押し込めたような顔をする。

「今だって自分を別のところから見てるわ。今の私はいそがしい  
顔をしているのでしょうね。」

私はあなたからの話しを聞いて思ったのは何だと思う？

さすが私の親、よ。ふふふ、自分でも思ってるみたいね。私は狂っ  
てるって・・・

ふふ、きつと私はいつかあんな・・・ふ・・・う・・・に」

トサッ

アリシアは俺の手と手をくわらって倒れる。

クライドは悲しげにアリシアをみる。

「・・・こんなに小さいのに、人によっては一生見なくていいよう  
なものを見たんだね」

「ああ、すでに心が壊れてる。もう治せない」

「そんな事言わなくて！！治るかもツツ！！？」

クライドは俺の目を見て黙る。

「実体験だ。こいつはもうトラウマとかそんな域じゃない。治せんえんだよ。」

壊しつくして、その獣の手綱をつかむしかねえんだよ。だがそれをやると、失敗して廃人になる可能性もある。今はまだ現状維持って奴だ」

「そうかい・・・」

「お前も覚悟しとけ。言つたる？物語を知ってるって。管理局はその中で何よりも闇が深い。次元世界最大の組織だから当たり前だ。」

俺は聞らないからいいが、お前が管理局に戻る以上こいつの言ったようなことを見ることあるだろう

・・・いや、その前に自分の希少さに注意しろ。お前は生き残るはずのない状況から生還したんだ  
おまえ自身がされるかも知れんぜ。

俺はこいつを寝かす。お前は今後についてでも考えな。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9445/>

---

平穏に生きたかった・・・

2011年3月16日21時42分発行